



本田 悠里さん

ジブチ
村落開発普及員
(2013年7月～2015年7月)

大 学卒業後、青年海外協力隊としてアフリカ北東部のジブチに行きました。活動先のアリアデ難民キャンプには、当時、約1万6,000人が住んでおり、その9割がソマリア、残りの1割がエチオピアやエリトリアからの難民でした。

私が主に担当していたのは、女性たちの就業支援です。前任の隊員が立ち上げた「お土産プロジェクト」を引き継ぎ、現地の布を使ったポーチやキーホルダーなどの手芸品作りを指導したり、約70人の女性メンバーにリーダー、経理、材料管理などの担当を振り分け、運営指導を行ったりしました。出来上がった商品は、首都にある日本

の自衛隊の拠点で販売してもらいました。メンバー自身の参加意識を確立することを常に意識した結果、次第にメンバー同士で助け合ったり教え合ったりする姿が見られるようになりました。ジブチで活動する多くの協力隊員の支えによって、私が帰国した今でも商品の販売が続いていると聞き、感謝の気持ちでいっぱいです。

活動を通じて感じたことは、手工芸の技術だけでなく、販売や運営のノウハウが身に付かなければ「生きていく力」にはつながらないということです。活動先のキャンプでは、ほとんどの人が「母国は危険だから戻り

たくない」と話していた一方で、将来は第3国に移住するという希望を多くの人が持っていました。その希望が叶い、新しい国での生活をスタートさせるときには、プロジェクトでの商品開発や販売の経験を少しでも役立ててくれたらと思います。

現在は仕事をしながら、週末には日本に住む難民の子どもたちの学習支援を行う団体にボランティアとして参加しています。難民支援には何が必要で、何が効果的なのか。その答えはまだ見つかっていませんが、隊員時代に持っていた視点はこれからも大切にしていきたいと思います。



商品開発に取り組む女性メンバーと本田さん。販売で得た利益の一部をみんなで貯金して、ヤギを購入したことも

ヨルダンに雪が降った日、女子校の子どもたちと一緒に雪だるまの工作に挑戦した



小林 英里佳さん

ヨルダン
美術 (2013年7月～2015年3月)

大 学卒業後に神戸市の中学校教員として働いていたころ、開発途上国を旅したり、JICAの教師海外研修に参加したりしたことをきっかけに、「自分の力で何か世界に貢献したい」という思いが芽生えました。そこで、2013年から約2年間、青年海外協力隊の現職教員特別参加制度を活用し、ヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプで活動しました。

このキャンプは1955年に作られ、難民

の人々が長年にわたり家や商店などを建てていったため、キャンプというより人口密度の高い一つの街のようになっていました。美術隊員として派遣された私は、キャンプ内にある女子校で、「全員が楽しめる美術の授業」を目指してカリキュラム作りなどに取り組みました。日本の学校とは違い、絵の具はもちろん、画用紙やペンなども十分にそろわない環境ですが、できるだけ現地で手に入る道具や廃材などを使った授業を

心掛けました。

また、現地の美術教師の女性に対する技術指導も行いました。最初は、「難しすぎる、もっと楽に働きたい」と言われたため、できる限り何でも彼女に相談することで信頼関係を築きながら、新しい提案をしていくようにしました。私が帰国する直前、彼女が、「いろいろなことに挑戦できた2年間だった」と言ってくれたことは、私にとって何よりの成果だと感じます。

活動中には、現地の教育委員会の人から、「生活環境が一定レベルに達していないければ情操教育を行う意味はない」と言われたこともあります。美術教育の重要性を理解してもらうには時間がかかりそうですが、心に寂しさを抱えている子どもたちだからこそ、心を解き放つ一瞬が必要だと思います。現在、教員として勤めている小学校でも、この経験を子どもたちに伝えていきたいです。



水野 里奈さん

シリア・ヨルダン
幼児教育 (2010年3月～2012年3月)

ヨルダン
青少年活動 (2013年4月～12月 短期)

2 013年4月から約8カ月間、ヨルダンにあるシリア難民キャンプで短期ボランティアとして活動しました。当時のキャンプには初等教育機関が4カ所あるだけで、ほとんどの子どもが学校に通えずにいました。もっと上の年代の若者は、「高等教育機関を作ってほしい」と話していて、子どもたちの将来を心配せずにはられませんでした。

私の活動は、国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン」が運営する施設で、14歳までの子どもに対して、ボール、縄、フラフープなどの道具を使った“遊び”を提供することです。施設ではヨルダン人とシリア人のスタッフが働いており、子どもたちは学校に通っていない時間帯に自由に遊びに来ることが

できます。当初、子どもたちは同じ遊びが繰り返されることに飽きていたため、私は道具を組み合わせるべく新しい遊びを作り出すように心掛けました。また、私が帰国した後も継続できるように、現地にあるものを使うことを常に念頭に置きました。

中でも、音楽から離れた生活を送る子どもたちにアラブ音楽に合わせた体操を教えたところ、多くの子が気に入ってくれました。キャンプは人の入れ替わりが激しく、今日出会った子どもでも翌日には会えなくなるかもしれせん。それなら、せめて一緒に過ごす時間だけでも笑顔になってほしいと思いな

がら活動を続けました。

私は2010年にも青年海外協力隊として、平和だったシリアで活動しましたが、それからわずか数年の間で多くの人が家族や故郷を失ってしまったことにショックを受けました。それでも、シリア人としての誇りと、彼らの優しい人柄は変わっていませんでした。今後は出前講座やイベントなどでシリアのことを伝え続け、何十年後になるかわかりませんが、再びシリアに戻って活動することが目標です。

2010年に水野さんが活動していたシリアの幼稚園。このとき子どもたちと一緒に踊った体操を難民キャンプでも教えた



青年海外協力隊の活動記

～今、私にできること～

世界各地の難民キャンプでは、青年海外協力隊をはじめとするJICAボランティアが活動している。

草の根レベルで現地の人々との関係を育む協力隊だからこそできることは――。

帰国した隊員たちに、現地で感じたことや今の思いを聞いた。